

蓄電池代わりに電気自動車・プロパンガス活用

災害時でも調理・宅配

幼稚園の給食や仕出し弁当などを扱う大和市の安田物産が、蓄電池代わりに電気自動車を使うなど、従来のエネルギー供給に頼らない独自のシステムを持つ新工場を2月から稼働させた。災害時でもいち早く営業が再開できるという。システム自体の商品化も検討中だ。

大和の弁当会社が新工場



安田物産は、大和市、横浜などにある90の幼稚園、18の介護施設に弁当を販売。50人の調理スタッフが多い日は6千食を自社工場で作る。メニューを毎日変え、アレルギーにも対応し、できたてを施設まで届けるのが売りだ。

東日本大震災で、工場の被害はほとんどなかったが、計画停電で調理施設が全く使えなかった。煮炊きの大半はプロパンガスでできるのに、電気を使う調理施設のスイッチのオン・オフができなかった。

安田幹仁社長(38)は震災対策が皆無だったことに気付いた。被災地で電気、ガス、水道が長期間復旧しなかったのを見て、ひとつとではないと思った。「地元密着の企業として、災害時でも子どもやお年寄りに食事をお届けするのが使命なの

安田物産の新工場は、いざという時、電気自動車から電気を受け取る仕組みを備える。大和市

3・11から未来へ

に、このままではまずい」「自社で電気をためておけないか」。安田社長は電気自動車を蓄電池代わりに使うことを考えた。自動車販売会社と協議を重ね、災害の際に車の電気を工場に送る新システムを整えた。

総蓄電量は24キロワット。1台分ではまだ十分ではないが、新工場の照明などの大半はまかなえる。このほかにも、調理用の水の巨大タンクに太陽光発電設備を取り付け、プロパンガスのタンク容量も増やした。

同社の創業は1955年。当時はプロパンガス専門で、今も販売を続けている。被災地の取引先から、大震災で都市ガスは止まったが、プロパンはほとんど影響を受けなかったと聞き、安田さんはプロパンの強みを再認識した。

「外からのライフランに頼らない独立型のエネルギーシステムは今後、24時間運営の病院などで需要が増えるはず。災害時に強いプロパンと電気などを融合させた新システムをさらに改良し、売り出していきたい」(植松佳香)



「三島由紀夫の自衛隊接近」を手にする涌田佑さん

三島由紀夫の後半生描く

相模原の涌田さん、本出版

相模原市南区の文学研究者、涌田佑さん(84)が「三島由紀夫の自衛隊接近」を出版した。東大在学中に高座海軍工廠(座間市)に勤

労働員された三島が、自衛隊で自決するまでを描いた。三島は1945(昭和20)年5月から終戦までの4カ月間、高座の海軍工廠で働いた。三島自身の当時の記録は残っていないが、涌田さんの平塚の工廠での動員経験から「東大生は事

務作業が中心だったろう」と推測する。三島は工廠の寄宿舎に資料を持ち込み、足利義政らを描いた小説「中世」を執筆していたとされる。観念の美を創り出すことに没頭し、「戦争の影響はまったく無かった」と涌田さん。一方で、涌田さんは「中世」の結語に着目した。「死ぬ時期は選べなくとも、どうして死に場所を選べないことがあるのか」

顧

「スポーツがやってきた近代横浜スポーツ史」横濱開港資料館